

棚田学会通信

号外

石塚克彦氏を悼む

創立以来、棚田学会の発展にご尽力頂きました石塚克彦氏が、10月27日に突然に逝去されました。

葬儀は下記の通り執り行われました。棚田学会の会員の方も大勢お越しいただき、石塚さんらしく賑やかに送ることができました。

日時：通夜 11月2日(月) 18時 ~ 19時
 上映会 11月3日(火) 9時50分 ~ 10時30分
 葬儀 11月3日(火) 10時30分 ~ 12時
 場所：幡随院(東京都小金井市前原町3-27-1)
 主催：新生ふるきやら



弔辞

石塚克彦さん

石塚さんのお付き合いが始まってから、はや30年たちます。私のような、中学のときにアメリカ発のミュージカル「ウエストサイド物語」にイカれていた世代にとって、「親父と嫁さん」、「ザ結婚」、「ムラは3・3・7拍子」「男のロマン女のフマン」「パパは家族の用心棒」等々は、ストーリーも、音楽も、踊りも、どれも新鮮でとても魅力的でした。

とりわけ、大学で農学を学び、農業農村の振興に関する教育と研究に携わっていた私にとってうれしかったことは、そもそも「ふるさときゃらばん」と言う劇団名が示すように、日本の田舎を舞台にした「農村ミュージカル」だったことです。

石塚さんは、「田んぼを渡ってくる風」「海と山とは兄弟仁義」「ツバメ」など劇中の多くの名曲に乗せて、日本の農業や農作物や農業者、土や水や自然生態系のことを、書籍などで読むよりも格段に解りやすく、かつ極めて印象的に、語られましたね。ふるさときゃらばんのミュージカルは、巡業先の農村地域では農業関係者を大いに励まし、大都市部での舞台では、多くの都市民に農業・農村の大切さを気付かせました。石塚さんの、こうした面で現代の日本社会に及ぼしたご功績は、文字通り偉大であったと言わなければなりません。

石塚さんから、1995年に、日本の山間地域に「風前の灯」のようにして残っている「美しい棚田」を研究している学者を紹介してほしいとの依頼があり、私は地理学者の中島峰広先生をご紹介しましたね。そして石塚さんは、棚田に関心のある学者に加えて、農家の方々や、心ある市民など、様々な会員を募集して、「棚田学会」を設立することを提案されました。このあなたの動きが、1999年「棚田学会」の誕生に結びつき、今日まで16年間、あなたにはその副会長として、私たちをご指導、ご支援いただいたわけです。現棚田学会を代表するものとして、心から感謝を申し上げる次第です。

石塚さんのご訃報を受けたばかりの今は、石塚さんの大きく深い「ご遺志」をいかに引き継いで行けるのか、ただただ思い悩むばかりです。

しかし、石塚さんが「肥料」とともに撒かれた「種」は、必ず芽を出し茎を伸ばし、あちこちで美しい花を咲かせ、豊かな実を稔らせることは疑い得ないことです。どうか末永く私どもをお見守りくださいますようお願いして、甚だ楚辞ながら、故石塚克彦さんへの弔辞といたします。

2015年11月3日

棚田学会会長・東京農工大学名誉教授 千賀裕太郎

石塚克彦氏プロフィール

1937年8月4日、栃木県烏山町(現・那須烏山市)生まれ。武蔵野美術学校洋画科。古美術研究で奈良に遊学。平城京発掘に参加。シナリオライター山形雄策氏に師事。日本劇作家協会会員。1985年、「ふるさときゃらばん」脚本・演出・美術プランナーとして「ふるさときゃらばん」第1作、ミュージカル『親父と嫁さん』を上演、文化庁芸術祭賞を受賞。1987年、第3回日本舞台芸術家組合賞を受賞。1991年、日米合作ミュージカルのメインライターとして「LABOR OF LOVE」を上演、日米両国ツアー、バルセロナオリンピック芸術祭に招聘される。1994年、第1回全国棚田(千枚田)サミット、1999年~2006年、東京日本橋三越での棚田展他をプロデュース。1999年、「棚田学会」を設立。棚田学会副会長。全国棚田(千枚田)連絡協議会理事。2000年、東京芸術劇場ミュージカル月間にて最優秀賞を受賞。2003年、映画「走れ!ケッタマシン」で初監督。「MUSICAL COMPANY 株式会社チーム石塚・新生ふるきやら」代表。2015年10月27日逝去。

石塚さんを悼む

棚田学会顧問・早稲田大学名誉教授 中島 峰広

石塚克彦さんの死は、棚田に輝きをもたらした巨星墮つ感を強くする。石塚さんは棚田の存在がほとんど知られてなかった時、このままでは消えてなくなるという危機感から、奇しくも本年4月に亡くなった高知県高知市の中越準一さんと力を合わせ、全国棚田連絡協議会を立ち上げ第一回全国棚田(千枚田)サミットの開催を実現させた第一の功労者である。それ以降世間の棚田に対する関心は飛躍的に高まった。また、棚田の保全を標榜する棚田学会も石塚さんが当時文化庁の主任文化財調査官だった大島暁雄さんに学会創設の相談をしたことがきっかけになり結成された。さらに、主宰する劇団ふるさときゃらばんの公演活動を通じ棚田への応援歌を歌い上げ、棚田よ消えるなど鼓舞し続けたのも石塚さんである。このような石塚さんの遺旨を受け継ぎ、残されたわれわれは存亡の危機にある棚田の研究と保全に全力を尽くさなければならない。石塚さん安らかに眠りください。

石塚さんとの思い出

棚田学会監事・早稲田大学教授 海老澤 衷

石塚さんとの思い出を辿ると、高田馬場にあった「ふるきやら倶楽部」に行き着きます。一九九九年春、石井進先生のお誘いを受けて、棚田学会の準備会に参加した時のことでした。「ふるきやら倶楽部」は駅に近いマンションの六階にあり、真ん中の広い部屋には四季農耕図の屏風があって、都会の隠れ里の雰囲気があり、季節のおいしい料理を食べながら、べらめえ調の石塚さんを囲んで談論風発。人生のオアシス、桃源郷とはこのことかと思いました。

石塚さんの思い出

棚田学会理事・宇都宮大学名誉教授 水谷 正一

ダンディでちょっと不良っぽい石塚さん、学者は理屈ばかりで面白くないといっていた石塚さん、思い切ったことを何食わぬ顔でやりぬく石塚さん。そして、もっとも私の記憶に残っているのは、バリ

島・ウブドウでのことです。棚田学会海外研修会の最終日、みやげ屋の一角にがっしりした木馬の椅子がありました。それに目を留めた石塚さん、やおら価格交渉の始まりです。飛行場に移動する時間が迫っていますが、最後はみやげ屋がギブアップ。石塚さんの誇らしげでちょっぴりはにかんだ表情がすべてを物語っていました。万年青年だった石塚さん、安らかに眠りください。合掌。

「しなやかさ」と確信

棚田学会評議員・國學院大学教授 小川 直之

石塚克彦さんがいなかったら、棚田学会はできなかったと思う。高田馬場のふるきやら倶楽部で何度も開かれた学会設立の準備会、三越での棚田展示会、そして棚田学会の発足と運営、いずれも石塚さんは「しなやか」な柔軟な対応で仲間を増やされた。一方では、記念誌の作成時には棚田の評価を下げたくないと言主張されるなど、棚田の高い価値には確信を持っておられた。棚田の風景は、石塚さんの原風景でもあったと思う。

石塚さんを悼む

棚田学会理事・国際農林水産業研究センター
山岡 和純

石塚克彦さんの思わぬ悲報にただ絶句し、在りし日のお姿、お声、しぐさの一つ一つが脳裏に蘇って参ります。初めての出会いは確か平成9年の農林水産省本省の会議室でした。ドブネズミルックが定番の霞が関では凡そ見掛けない、トレードマークのバンダナ+カジュアルな出で立ちは、衝撃でした。が、齒に衣着せぬお話しぶりは、史上初の棚田保全国庫補助事業の立ち上げに奔走していた担当課長補佐の私と妙に馬が合い、意気投合したことを鮮明に覚えています。あれから早や20年近い月日が流れたのですね。どうぞ天国から引き続き私たちをお導きください。合掌。

棚田学会通信 号外

2015年11月20日発行

発行 / 棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagakkai@gmail.com